見本

新時代の保育双書

保育内容
環　境

第3版

みらい

見本

はじめに

本書初版は、21世紀の社会の子どもたちの育ちにふさわしい保育環境を考えるテキストとして2006（平成18）年に刊行しました。そして、2008（平成20）年度からの保育所保育指針や幼稚園教育要領の改訂にあわせて第２版では一部新たな内容を加え、おかげさまでこの12年間毎年教科書として採用いただいてきました。この度、2018（平成30）年度からの幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂や、教職課程コアカリキュラム、保育士養成課程等の見直しに関する報告書に基づき、内容も新たに第３版として刊行することとなりました。最新の考え方も入っています。そこで一部の筆者と編者に若手が加わることで、さらなるパワーアップをはかることといたしました。

本書の特色は、これからの保育者に求められる専門性を考え、知識と同時に実践を考えてもらう機会を増やすべく理論編と実践編に分けたことです。理論編では、領域「環境」の基本的な考え方や、具体的な保育空間や状況でどのようにすることが環境を構成することになるのかを理解できるようにしました。多様な観点から、さまざまな場の環境についてのイメージを具体的にもっていただけるような章立てとしました。読者の皆様に、実感をもって納得してもらえることを願って書きました。

実践編では、理論編で学んだことを踏まえ、実際に自分が保育者だったらどのように考えるか、どのようにするかというように、事例を通して具体的に「環境」を考え、受講生同士が語り合えるようなシミュレーション式のワークができる構成としました。これからの社会に求められる保育者は、保育者養成校で教わった基本的な知識や技能と資格を持つだけではなく、実際に出会うであろう各々の場面で、その知識を使って子どもの心情を理解し、子どもに対してどのようにかかわるのか、どのように援助するのかを自ら考え、判断し、行動し、振り返り、学び続けていくことが重要です。医者や弁護士と同じように、さまざまな事例から学ぶことで見識を深めるのが専門家の学び方です。他者との対話を通して行動のレパートリーとして豊かな知恵袋を持っていることが大切です。本書では、事例をまず一人で考えてもらえるようになっています。そして受講生同士で話し合って演習に使用したり、園内研修の中で話し合ったりするなど、主体的・対話的で深い学びのための教材として、広くいろいろな形で活用し、環境についてさらに理解を深めてもらえることを期待しております。

「環境を通した教育」は日本の保育の基本です。なかでも領域「環境」は、他国にはない独自領域であり、多様な環境について理解を深めることで、子どもの育ちの豊かさを保障する大事な領域です。本書が、保育のおもしろさと豊かさを知る一助となれば幸いです。

2018年１月

編者を代表して　秋 田　喜代美

見本

●目　次●

第１部　基礎編　－保育における領域「環境」の理解－

第１章　保育と環境

第１節　子どもにとっての「環境」……10
　1 ―― 日常と保育で使われる意味の違い／10
　2 ―― 意味のある関係としての環境／11
　3 ―― 保育環境の質を保障するために／12
第２節　発達にふさわしい環境の構成……15
　1 ―― 「発達にふさわしい」とは／15
　2 ―― 時代の要請に応じた環境／16
　3 ―― デザインし構成するものとしての環境／17
コラム：園庭探検とマップ／19

第２章　領域「環境」のとらえ方と考え方

第１節　子どもにとって魅力ある園環境とは……20
第２節　保育の基本をふまえた領域「環境」とは……22
　1 ―― 環境のあり方と保育の基本／22
　2 ―― 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の基本的視点／23
　3 ―― 幼稚園教育要領における「環境」／24
第３節　乳児と領域「環境」―乳児・３歳未満児の保育環境―……25
　1　乳児保育における環境／25
　2　１歳以上３歳未満児における環境／27
第４節　幼児と領域「環境」―３歳以上児の保育環境―……29
第５節　新しい時代に向けた保育環境とは……31

第３章　保育環境の構成―子どもたちもその担い手に―

第１節　環境について考える―あるエピソードから―……33
第２節　遊びのきっかけとなる環境の構成……34
　1 ―― ３法令にみる領域「環境」のねらい―キーワードとしての「好奇心」―／34
　2 ―― 遊びのきっかけとなる環境の構成／35
　3 ―― 子どもたちの興味関心を踏まえた環境の構成／36

見本

第３節　遊びが安定・持続・展開する環境構成 ……38
1 ―― 遊びが安定・持続・展開する環境の構成／38
2 ―― 試行錯誤や工夫が生まれる環境の構成／39
コラム：環境教育／41

第４章　友だちや保育者とともに育つ―人的環境―

第１節　子どもにとっての保育者の意味 ……42
1 ―― 愛着や信頼関係の積み重ねが主体性につながる／43
2 ―― 心をひきつける保育者／44
3 ―― 思いをつなぐ保育者／45
第２節　保育者にとっての子どもの意味 ……46
1 ―― 子どもから知らされる／46
2 ―― さまざまなとらえ方を教えてくれる／47
第３節　子どもにとっての友だち……48
1 ―― 友だちがいてくれる心地よさ／48
2 ―― 挑戦意欲の高まりに／49
3 ―― 対話的な学びの基礎に／50
第４節　異年齢の子どもやさまざまな人とのかかわり ……50
1 ―― 近隣の小中学校と／51
2 ―― 異年齢のかかわり／51
3 ―― 高齢者とのかかわり／51
4 ―― 地域の応援団、ゲストティーチャー／52

第５章　豊かな生活を育む環境をデザインする―物的環境―

第１節　乳幼児にとって魅力ある保育環境をデザインする……53
1 ―― 保育環境をデザインする／53
2 ―― 保育環境のデザインと物的環境／54
3 ―― 乳幼児にとって魅力ある環境とは／56
第２節　屋内環境をデザインする―子どもの生活や遊びを豊かにする環境― ……60
1 ―― 保育室／60
2 ―― 遊戯室・ホール／62
3 ―― テラスや廊下／64
第３節　物「素材・道具」とのかかわり ……65
1 ―― 教材としての素材や道具・生き物／65
2 ―― 好奇心や試行錯誤、工夫の育ち―水族館の事例から―／66

見本

第４節　屋外環境をデザインする―園庭のもつ意味の重要性― ……73
1 ―― 遊びのための屋外環境としての園庭／73
2 ―― さまざまな園庭と子どもの経験／76
第５節　生活に必要な文字や数、量などにふれる ……79
1 ―― 数／79
2 ―― 量／80
3 ―― 図　形／81
4 ―― 文　字／82

第６章　生き物や植物、自然の事象に関心をもつ―自然環境―

第１節　自然の事象への関心 ……84
1 ―― 四季の変化にふれて生活する／84
2 ―― 季節の変化と年中行事／85
第２節　自然や身近な動植物とかかわる保育と領域「環境」 ……86
1 ―― 領域「環境」の内容から／86
2 ―― 自然や身近な動植物とかかわる保育のための保育者の役割／88
3 ―― 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿―「自然との関わり・生命尊重」―／88
4 ―― 具体的な活動や保育環境の工夫／89
第３節　生き物や植物とのかかわりの基礎知識 ……91
1 ―― 身近な小動物や昆虫とのかかわり／91
2 ―― 身近な植物と草花や野菜の栽培／92
第４節　自然環境と持続可能な社会 ……95
1 ―― 子どもと持続可能な社会／95
2 ―― 自然環境と園庭／96

第７章　自分を取り巻く社会の文化にふれる―社会的環境―

第１節　園生活における行事の意義 ……101
1 ―― 儀式的行事／101
2 ―― 学芸的行事／103
3 ―― 健康・安全・体育的行事／103
4 ―― 遠足・宿泊的行事／103
第２節　園内の身近な社会文化にふれて育つ ……104
1 ―― 身近な物にかかわり、大切にする／104
2 ―― 身近な文化としての絵本や物語／104
3 ―― 視聴覚教材や情報機器を活用する／105

見本

4 ―― 国旗に親しむ／105
第3節　地域環境や地域の人々とふれあう ……106
1 ―― 地域や社会に出会う―身近な施設に親しみをもつ―／106
2 ―― 地域の人々との継続的な交流／107
第4節　小学校との連携……112
1 ―― 小学校との連携とは／112
2 ―― 小学校との交流／114
3 ―― スタートカリキュラム／115

第8章　子どもを守る安全な環境

第1節　「安全」「命を守る」ことが絶対条件 ……119
第2節　安全な環境を脅かす要因 ……120
1 ―― アクシデント（事故）／121
2 ―― ハザードとリスク／121
第3節　リスクと遊びの両立 ……123
1 ―― 遊びのなかにあるリスク／123
2 ―― リスクと子どもの育ち／124
3 ―― 保育者の配慮／125
第4節　ヒヤリ・ハットを生かす ……125

第2部　実践編　－環境を通した活動の実際－

1　環境にかかわる子どもの姿 128
(1)　発達にふさわしい環境を構成するということ／128
(2)　子どもの行為がどの育ちの芽になっていくかを見極める／129
(3)　一人ひとりの子どもの育ちの側面を理解する／130

2　乳児（0歳児・3歳未満児）と環境の事例 132
(1)　乳児（0歳児）と環境とのかかわり／132
(2)　乳児（2歳児）と環境とのかかわり／134

3　友だちとの遊びを広げながら育つ事例 137
(1)　友だちとのかかわりによる遊びの広がり／137

見本

(2) 友だちとのかかわりによる遊びの継続／138
(3) 友だちとのかかわりによる遊びの継続と広がり／140

4 子どもと保育者、異年齢とのかかわりの中で育つ事例 142

(1) 子どもと保育者の信頼関係の構築／142
(2) 子どもから刺激を受けて、保育のあり方に気づいていく／144
(3) 小さい年齢の子どもが大きい年齢の子どもから受ける影響や刺激／146
(4) 大きい年齢の子どもが小さい年齢の子どもから受ける影響や刺激／147

5 魅力のある屋外環境と屋内環境の事例 150

(1) 魅力のある屋外環境／150
(2) 魅力のある屋内環境／153

6 生き物、自然現象とかかわる事例 156

(1) 生き物とかかわる事例／156
(2) 植物・栽培にかかわる事例／158
(3) 自然現象とかかわる事例／160

7 文字や数量への興味関心に関する事例 162

(1) 文字への興味・関心を育てる事例／162
(2) 数量への興味・関心を育てる事例／165

8 園行事や地域との交流の事例 168

(1) 生活発表会／168
(2) 運動会／169
(3) 地域の発見／170
(4) 多文化を理解する／172

索引／174

見本

第1章 保育と環境

◆キーポイント◆

保育において「環境」とは具体的に何を指すのだろうか。本章では、「子どもにとっての環境」についての基本的な考え方と、なぜ領域「環境」が重要なのか、また保育で環境をデザインするとは何をすることかを順に考えていきたい。

第1節 ● 子どもにとっての「環境」

1 ── 日常と保育で使われる意味の違い

「環境」。この言葉からどのようなことをイメージされるだろうか。緑豊かな自然環境、公害などの環境汚染、家庭環境など、さまざまな言葉が浮かぶかもしれない。「環境」という語を辞書（広辞苑）で引くと、「人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼしあうものとしてみた外界。自然的環境と社会的環境とがある」と書かれている。この説明からは、子どもや私たちをとりまいて外側にある世界全体を指すものととらえられるだろう。つまり、環境は、誰にとっても同じ共通する事物を意味しているととらえられる。これは、環境についての客観的な見方である。

しかし保育の専門家として、保育における「環境」について考えるときには、私たちの外側にあるもののなかでも、ある事物や場に子どもはどのようにかかわっているのか、子どもたちのくらしや遊び、学びにとって、その事物や場はどのような機能や意味をもつものなのか、保育者は子どもに園でどのような経験をしてもらいたいのかという点から、周りのものをみる見方、子どもの気持ちや興味関心に寄りそった主観的見方、人とものとの関係や人とのかかわりという間主観的見方で、環境を考えることが必要である。つまり、環境は、園にいる子どもや保育者、保護者にとってある意味が与えられたときに初めて、保育の環境として機能することになる。子どもと周りの事物や人が出会いつながったときに、それは環境として意味をもってくる。その意味を問い、構成するのが、保育における「環境」の考え方である。

見本

たとえば、壁面に花の写真が貼ってあるとしよう。それが子どもの目線の高さにあり、子どもに何か心が魅(ひ)かれるものがあったときには、その写真は環境としての意味をもつだろう。園で咲いている花の拡大写真や、誰かの家の花の写真、珍しい花や遠足で見つけた花の写真や、植えたときから成長し花が咲くまでの過程の観察写真などの場合には、それに注目してとどまる子どもがいるだろう。そして、そこにとどまっているその子どもの姿を見て、他の子どももその写真に魅かれていくことになる。しかし、もし子どもの目線では見えない高さに写真があったり、新学年が始まってからずっと貼られたままで誰もそれに目をとめなくなっていたりというように、貼られた位置や時期が適切でない場合には、子どもにとって意味あるものではないので、保育の環境とはなっていない。

同じように、「地域」を考えてみよう。「地域」は自分の住んでいる町や場所を指す言葉である。そこにある町や店、図書館や施設などの場所を訪れ、人やものと子どもの間に関係ができて初めて、そこに愛着が生まれ、意味ある空間となる。子どもにとってかかわりのある人やお店・公園などができたり、散策していろいろな花や鳥がいることに気づいたり、おもしろい場所を発見したりしたときに初めて、地域はその子にとって「環境としての地域」になる。現在、戸外環境として、限られた園庭や代替地等の場合には、園庭だけではなく「拡張された園庭」として、足しげく通う公園や広場なども大事な環境となる。施設がそこにあるというだけではなく、興味関心のもてるつながりを子どもとその施設の間につくる機会を、保育者が与えることが大切なのである。ある5歳児担任の保育者は、進級し新たな仲間も加わったクラスで、園庭や地域に来る鳥や自然の写真を撮り、それでカードをつくって同じ写真の子が同じグループになることを試みた。それによって子どもたちは自然にその鳥や花をどこでみたか、なんという名前かなど身のまわりの自然環境に関心をもち始め、戸外でも自分たちのグループの自然物や生き物に特に愛着をもつようになっていった。このように、環境は、出会いの連鎖を通してより深く子どもたちとつながっていくものである。

2 ── 意味のある関係としての環境

環境は、子どもや保育者が出会い、かかわり、つくり出した意味の網の目のなかにある。新たな出会いの可能性をもった人や物、場のネットワークが環境であるといえる。この意味で、子どもの周りに何か物があれば環境であるという考え方ではなく、子どもとともに、子どもとの間に環境は構成され

見本

ていくものと考えることが大切である。

「寒い、温かい、明るい、どんよりしている、なつかしいにおい、ひんやりとしている」などの感覚、温度や光、天候、木々の香りなど、目には見えなくても五感で感じとれる情報もまた、子どもたちにとっての重要な環境である。子どもが何かのきっかけによって注意を向け、感じとるチャンスが与えられることで環境になる。たとえば砂場の砂を考えてみよう。固まった状態、湿った状態、掘り起こされてやわらかくなった状態、水が入れられた状態など、園庭に砂場があるというだけではなく、砂の状態によって遊びは変化してくる。したがって、子どもたちの遊びの展開を見ながら、どのような状態を砂場に準備しておくのがよいかを考えることが大切になってくる。

このような意味で、保育者は育ちゆく子どもの状況、移り変わる事物の状況に目を配り、時をとらえて子どもと事物との出会いの機会を準備する役割を担っているといえる。

目の前の子どもの興味・関心や具体的な姿をとらえる「子どもの姿の読み取り・評価」、それをもとに発達を見通し、こんなふうに伸びていくといいなという「保育者の願い」が生まれる。そして、その実現のためにどのような活動を展開すればよいかの「保育の構想・計画」が生まれ、子どもが主体的にかかわりたくなるような「環境の構成」をデザインすることになる。さらに、そこでの子どもの姿から、こんな援助をすればもっと発展するかもという思いが生まれ「環境の再構成」が生じる[1)]。このサイクルを通して環境をデザインしていくことが、意味ある環境を具体的に生み出していく保育実践になる。

3 ―― 保育環境の質を保障するために

⑴　環境を通しての教育

「環境を通しての教育」。保育においては、保育者は教育の意図を保育環境のなかに埋め込み、子どもたちはその環境と出会っていくことが求められる。つまり、小学校以上での授業のように、教科書を使って言葉で説明して教える教育とは教育方法の構造が基本的に異なり、子どもにとって出会うことが望ましいと思われる環境を保育のなかに準備し、子どもたちがその環境と出会い、主体的にかかわることを援助することが、保育における基本である。そのために保育者は、子どもが主体的にかかわり選ぶことができるような「適当な環境」(学校教育法22条）を準備することが重要である。

見本

保育は保育者という専門家が一定の時間子どもを預かって行う仕事である。子どもの発達にとって必要で、ふさわしいと思える環境とのかかわりを偏りなく経験させるために、子どもの発達や保育教材、保育方法などの専門的知識を背景に、保育者が適当な環境を子どもとともに準備構成していく。

⑵　構造の質と過程の質

保育環境には、「構造の質」と「過程の質」という二つの面がある[2)]。「構造の質」とは、空間の広さや間取り、配置、保育者と子どもの比率や学級の人数、預かる時間など、園であらかじめ決まっている比較的不動の面である。子どもが生活をするのに安全で、衛生的であること、大人の目が届き、さまざまな活動をするのに必要な広さの空間があることが保障されることが、まずは保育の基盤となる。

そして「過程の質」とは、保育が進められていくなかで保育者と子どもとのやりとり、子ども同士のやりとりがどのような形のものであるのか、空間がどのように伸縮自在・柔軟に構成され、そこでどのような活動がどれぐらい継続してなされているのか、個人的な日常のケアはどのように行われているのかといった、子どもたちが直接経験する保育活動の質、その活動のために用意される可動する環境の質である。日々の保育環境を考えていくには、この「過程の質」が子どもにとって意味あるものとなっているかを確かめていくことが大切である。

また「構造の質」と「過程の質」はそれぞれ独立ではなく、相互にかかわりあっている。たとえば、場は狭くてもそこでの工夫によってやりとりを深めることも可能である。このような関係を支えているのが「志向性の質」、その園の保育では何を大事にするのかということである。たとえば園庭での遊びを考えたときに、グラウンドでの運動遊びを大事にしたいのか、自分の身を守る危険予知や自己防業のスキルを育てたいのか、動植物や自然の探究や水・砂・土の遊びを大事にしたいのかなどによって、その場の活用の仕方は変わってくる。室内のイスや机の使用も、どのような保育方法でいかなる活動を主活動にするかで変わってくる。そして、よりよい保育の可能性を職員全員で振り返ってみようとするのが「モニタリングの質」と呼ばれる振り返り評価の質となる。保育の質という視点から環境を見るときにも多様な視点が考えられる[3)]。

⑶　教育課程や全体的な計画における領域「環境」

保育において、過程の質を保証するソフトウェアとして働くのが、教育課

見本

改善前には、この道は子どもたちがほとんど行かない場所であったが、さまざまな素材を置くことによって、子どもたちが歩きながら足の裏でいろいろな道の固さを感じたり、遊具を持ち込んだりして小さな子どもが落ち着いて遊ぶ場へと変わった例である。そこに、環境をデザインし構成することのおもしろさ、保育者の個性、園の個性が発揮される。そのため保育者は、「これは変えることができない場所」「この場所でこのように使う物」と決めてかからずに、柔軟な発想で、さまざまなものをさまざまな場や活動とつないで考えてみることが大切である。

同じ場所、広さでもどこにどのようなものを配置するのかによって変わってくる。絵本でも表紙がみえているのか、ただ並んでいるのか、乱雑にその場所に置かれているのか。その並べ方が子どもたちの経験に影響を与えていく。子どもたちは、ものがどのように保育者やまわりの子どもたちによって扱われているのかを見て、ものの扱いを学んでいく。環境から見て学ぶことの影響は大きい。

保育の場は、複数の子どもたちが一緒にさまざまな活動をする場である。したがって、子どもたち相互の活動の動線を考え、それぞれの場に意味を与えていくことも大切である。製作する場、動いて遊ぶ場、落ち着いて本を見る場、集まる場などいろいろな場がある。固定されていることで安心してかかわれるという面と、活動に応じて柔軟に伸縮自在の空間や時間をデザインすることの両面を備えることが、子どもの活動の展開にふさわしい環境づくりのために大切である。そしてその環境へと子どもたちの目を向けるためのつなぎ手となるのが、保育者である。

そこで次章からは、領域「環境」においてどのように保育者が環境をデザインし、かかわっていくことが必要かを、さらに具体的にみていくことにしよう。

●「第１章」学びの確認

①1989（平成元）年からの改訂ごとに、幼稚園教育要領では領域「環境」の文言はどのように変わってきているか、変わっていないところはどこかを確認しまとめてみよう。

②発達にふさわしい室内環境として、乳児、３歳未満児、３・４・５歳児のそれぞれで大事にしたいことは何かを自分なりに考え、隣の人と話し合ってみよう。

●発展的な学びへ

①自然環境を豊かにするために、園の環境構成において大事なことを考えてみよう。

②自分の住む地域において、幼児が活用できる社会文化的環境としてどのようなことがあるかを話し合ってみよう。

見本

●○●　コラム　●○●

園庭探検とマップ

園庭にある植物がどのようなものか、年長の子どもたちと一緒に保育者もよく見てみよう。見ているようで気づいていないことや知っているつもりで知らない草花が多いことに気がつくだろう。園庭に実のなる植物やさまざまな形の葉の木などがあることを発見したら、園庭マップを作成し皆でその発見を共有できるよう一緒に見たり、掲示するのもよいだろう。

「ハートの形をしていて、葉っぱのふちがピンクなの、何の葉っぱか知ってる？」「スミレ？」「ブッブー、違います。どくだみでした」。園庭探検をした子どもが家に帰って、親子で交わした会話の一場面である。家庭との連携にもつながっている。この時期にはこの花や実があると、保育者が知っていると、いつ頃どのようにその実を活用しようか、花をつんでもよいことにしようかなど、予想をたてることができる。草木も大切な環境であり、教材である。名前を教えることを目的にするのではなく、その草木をめぐってどのような活動が展開されるのかを考えることで、園庭をみる目も変わってくるだろう。

そしてそのマップを活用した子どもたちの姿を記録すると、ドキュメンテーションとして保護者と共有することができる。そのことによって園庭は子どもたちや保育者にとってだけではなく、保護者にも共有されることになる。「その植物ならあそこにもありましたよ」といった地域の情報や家庭との連携も始まる。また園庭マップをもとに園庭についてどの場で何が行われているのかをみてみることから、どのような活動を保障しているのかに気づくこともできる。こうした試みの一つひとつが室内外の環境をより豊かにすることにつながっていくだろう。

引用・参考文献

1）岡上直子編『ワクワク　ドキドキが生まれる環境構成』ひかりのくに　2017年
2）Harms,T.. Clifford,R.M. & Cryer,D. 埋橋玲子（訳）『保育環境評価スケール１　幼児版』法律文化社　2004年
3）発達保育実践政策学センター園庭調査研究グループ『子どもの経験をより豊かに：園庭の質向上のための一工夫へのいざない』2018年
4）Rinaldi,C. 2005 *In dialogue with Reggio Emilia : Listening, researching and learning.* Routledge.
5）Reggio Children 2004 *Children, art, artists : the Expressive languages of children the artistic language of Alberto Burri.* Reggio Children.